

保育の質を高める保育者のスキルと態度

山田 秀江

四條畷学園短期大学

A skill and manner of a nursery teacher raising quality of the early childhood education and care

Hidemi Yamada

Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要 第49号 別刷

平成28年5月31日

保育の質を高める保育者のスキルと態度

山田 秀江 *

A skill and manner of a nursery teacher raising quality of the early childhood education and care

Hidemi Yamada

本研究では保育の質を評価する指標となる2つの評価スケールやチェックリストから保育の質を高めるために必要な保育者のスキルと態度を導き出した。その結果、子どもの主体性を尊重して活動の支援を行うスキルと子どもの社会性の発達を支援するスキル、子どもの認知的発達を支援するスキルの3つのスキルが必要であるとわかった。また、保育者は明るく、ポジティブな態度で子どもとかわること、物事を肯定的にとらえ、子どもとともに考えよりよくして行こうとする態度が必要であると分かった。このようなスキルや態度を身に付けた保育者養成の在り方を考えることが今後の課題である。

Key words: 保育の質・過程的な質・NICHD 長期追跡研究・SSTEW スケール・質を高めるスキルと態度

1. はじめに

近年、世界的に乳幼児期の保育の重要性が謳われ、保育需要が高まっている。乳幼児期は子どもの人生の基礎を形成する重要な時期であるという認識が広がり (OECD 2011 等)、そこへの投資を充実させることがその国全体の利益に繋がるということをノーベル経済学賞を受賞したヘックマン (2015) などが指摘している。

日本においても保育需要が高まり、大都市では待機児童の問題がなかなか解消されず困っている保護者も多い。保育所に入れなかったことをツイッターで呟き、それが社会問題として国会で取り上げられ、待機児童解消のための具体的な案の検討が進んでいる。施設内で預かれる子どもの数を増やすことや、子どもに対する保育士の数を緩和するなどの規制緩和を行い、より多くの子どもが保育施設に入れるような案が出されている。また、待機児童が解消されないのは施設が少ないという問題もあるが、それにも増して施設を増やしても働く保育士が足りないという問題が大きい。保育士の処遇改善が図られ、仕事の内容がきちんと評

価され、それに見合った報酬が得られれば保育士は増えると考えられる。そのための施策も各自自治体において講じられているところである。

そして保育の量を増やすとともに、保育の質も向上していかなければならない。量が増えるのに対して質が低下しては、乳幼児期という重要な時期を過ごす場としてふさわしくないのである。質の高い保育は子どもの発達により影響を与えるということは直接子どもと関わっている保育者の体験的な理解だけでなく諸外国で行われている様々な追跡研究を通して科学的に証明されている。(NICHD 2006 等)

アメリカ国立小児保健・人間発達研究所 (NICHD) の長期追跡研究では「保育の特徴の違いは子どもの発達にある程度の影響をもつことが分かった。」と述べられている。その主な結果の中で保育の質に関連する内容は以下のものである。「4歳半までの結果では、母親以外からの質の高い保育を受けている子どものほうが、質の低い保育を受けている子どもよりも、言語と知的発達の面で若干優れた発達を見せた。また、3歳までの結果では、質の高い保育を受けた子どもたちの協調性がより高いことが分かった。」また「乳児期、トドラー期 (よちよち歩きの時期)、就学前期を通して、保育の質は知的発達と中程度の関連を持っていた。保育の

* 四條畷学園短期大学 保育学科

質はまた、乳児期とトドラー期において子どもの社会性の発達とも中程度の関連があった。より高い質の保育を受ける子どもたちは、より低い質の保育を受ける子どもたちと比較して良好な発達の結果を示すことが分かった。」と述べられている。

このように質の高い保育を受けることは子どもの発達にとってよい影響を与えるということは明確だが、保育の質の要素とはどのようなものなのか、何をもちて保育の質を評価するのか、まだまだ日本では漠然と語られることが多いと言える。秋田ら（2015）は保育の質を検討評価するには2つの要因があると述べている。第1は構造的要因であり、第2は過程的・動的な要因である。構造の質とはグループサイズ（学級規模）や保育者の教育歴といった指標で数量的に把握しやすいものである。また、過程の質とは子どもと保育者、子ども同士、保育者と保護者、保育者同士のやりとりが中心にあり、観察や評価が困難なものである。アメリカ国立小児保健・人間発達研究所（NICHD）の長期追跡研究においても保育の質の定義を行っており、2つの要素として先述の秋田らの定義と同様に第1は保育の構造に関するもので、子どもと保育者の人数の比率とクラスごとの子ども数、担当の保育者が受けた教育のレベルを取り上げている。これらは公的機関等の規定で定められていることが多いので規定的特徴と呼んでいる。第2は子どもの保育施設での実際の日々の体験そのものに関するものでプロセス的特徴と呼んでいる。このプロセス的特徴に関して具体的ななかかわり方や養育態度を示し、そのチェックリストを作成している。

またイラムらは保育の質が長期的に子どもの発達に与える影響の縦断的研究をイングランドで行い、保育プロセスの質の評価スケールであるSSTEW (Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being)（「ともに考え、深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」）スケールを作成した。作成の経緯の中で「ともに考え、深めつづけること」という指標について以下のように述べられている。

‘sustained shared thinking’（「ともに考え、深めつづけること」）という用語は「効果的な幼児教育法調査（REPEY）」のデータを質的に分析していく中で、Siraj-Bratchfordら（2002）の論文で初めて使用したものです。・・・略・・・そこでは、保育環境がきわだって良（「良」あるいは「優」と評定された）12の保育施設における、保育所と子どもたちのやりと

りの観察・録画データに関する語りが分析されました。そして保育者が子どもと「ともに考え、深めつづけること」が子どもたちの社会情緒的、認知的な発達を支える上で、きわめて重要なスキルであることが明らかになりました。（記書原文）

子ども自身が考えることを保育者が一緒に考えたり、助言したり、見守ったりして支えることが子どもの発達によい影響を与えるということが上記の縦断研究の結果から分かった。このことは日本の保育現場でもしばしば見られる援助であり、そういったスキルを持つ保育者は子どもとの繋がりが深く、信頼関係を築くことができている。子どもの成長を感じながら子どもの思いに寄り添い、ともに考え深めていくという援助が質の高い保育だと言える。

そこで本研究では前述の研究から保育の質を構造的な質と過程的・動的な質の二つに分けて捉え、後者の過程的・動的な質に関してアメリカ国立小児保健・人間発達研究所（NICHD）の長期追跡研究（2010）から出されたプロセス的特徴に関する具体的ななかかわり方や養育態度の指標とイラム（2015）らが作成したSSTEWスケールを手掛かりに保育の質を向上させるために必要な保育者のスキルと態度について検討することを目的とする。

2. NICHDのプロセス的特徴について

NICHDの長期追跡研究では実際の保育場面の観察から、そこで行われている保育のより詳細な情報を元に分析し、質の高い保育として導かれた保育者のスキルや態度を指標化している。プロセス的特徴とは保育施設での日々体験そのものに関することであり、そのうち子どもの発達に一貫して最も深いかかわりを持っているのは“ポジティブな養育”である。具体的には子どもの行動に関する保育者の感受性の豊かさや子どもの興味とやる気を励ますような接し方、保育者と子どもとの頻繁なかかわりなどが含まれると述べられている。“ポジティブな養育”は保育者の行動を観察する保育の質の指標であり、具体的には以下の9つの大項目に分かれている。

- ポジティブな態度を示す。
- ポジティブな身体接触をする。
- 子どもの発声や発話に対応する。

- 子どもに質問する。
- そのほかの子どもへの話しかけ
 - ・ほめる。
 - ・学びの手助けをする。
 - ・お話を語ったり、歌をうたったりする。
- 発達をうながす。
- 社会的な行動の奨励。
- 読む力を伸ばす。
- 否定的なかかわりを回避する。

「ポジティブな態度」とは子どもたちに明るく笑顔で働きかけたり、子どもが困っていると温かく手助けをしたりする態度である。「ポジティブな身体接触」とは子どもとのスキンシップや子どもをなぐさめるような温かいかわりを持っているかということである。また、「子どもの発声や発話に應對する・子どもに質問する・そのほかの子どもへの話しかけ・発達をうながす・読む力を伸ばす」に関しては子どもとのコミュニケーションを通して、子どもに自信を与え、知的発達や運動的な発達をうながすようなスキルである「社会的な行動の奨励」では人とのかわりの中で心地よく過ごすことができるような子どもの社会性の発達を支えるスキルである。最後の否定的なかかわりを回避することは、自分の感情だけで子どもを怒鳴ったり、子どもの働きかけに無視をしたりというネガティブなかかわりをしないようにすることである。

このようなポジティブな養育が多ければ多いほど保育の質が高いものであるという研究の結果が出たと報告されている。また、構造的な質との関連から、保育者がより少ない人数の子どものケアをするときには、ポジティブな養育はより多く出現し、そのことが子どものよりよい発達に繋がっていく。同じことが保育者の教育レベルについてもあてはまる。教育歴が長く、専門教育の程度が高い保育者のほうがポジティブな養育はより多く出現し、そのことが子どものよりよい発達に繋がっていくということが報告された。以上のことから“ポジティブな養育”は保育の質を高める上で重要な指標であると結んでいる。

3. SSTEW スケールについて

SSTEW スケールでは、子どもたちの認知的な発

達をうながすためには「ともに考え、深めつづけること」という指標が非常に重要であると述べている。ケアと情緒的な安定・安心にのみ重点を置いている保育施設では子どもたちの認知的な発達は十分に見られない。また、保育者のスキルが保育の質における最も重要な要素であり、保育者が「ともに考え、深めつづけること」に取り組むためには高いスキルと知識が必要であると述べている。

そういった理由から SSTEW スケールでは「社会的、情緒的な安定・安心」だけでなく「ともに考え、深めつづけること」という指標についても取り上げている。

SSTEW スケールは発達のある特定の側面に関連する5つの領域をサブスケールと呼んでいる。各サブスケールは14の項目で構成され、さらに各項目は具体的な保育実践の記述である指標で構成されている。

また、「社会的、情緒的な安定・安心」「ともに考え、深めつづけること」に関連する発達領域は2つあり、社会的・情緒的な発達領域と認知的な発達領域である。それぞれが関連しているサブスケールは社会的、情緒的な発達では「1 信頼、自信、自立の構築」と「2 社会的・情緒的な安定・安心」であり、認知的な発達では「3 言葉・コミュニケーションを支え、広げる」「4 学びと批判的思考を支える」と「5 学び・言葉の発達を評価する」である。

それぞれのサブスケールと項目は以下の通りである。

- サブスケール1 信頼、自信、自立の構築
 - ・項目1 自己制御と社会的発達
 - ・項目2 子どもの選択と自立した遊びの支援
 - ・項目3 小グループ・個別のかわり、保育者の位置取り
- サブスケール2 社会的、情緒的な安定・安心
 - ・項目4 社会情緒的な安定・安心
- サブスケール3 言葉・コミュニケーションを支え、広げる
 - ・項目5 子ども同士の会話を支えること
 - ・項目6 保護者が子どもの声を聴くこと、子どもが他者の言葉を聴くように支えること
 - ・項目7 子どもの言葉の使用を保育者が支えること
 - ・項目8 迅速で適切な応答
- サブスケール4 学びと批判的思考を支える
 - ・項目9 好奇心と問題解決の支援

- ・項目 10 お話・本・歌・言葉遊びを通した「ともに考え、深めつづけること」
- ・項目 11 調べること・探究を通した「ともに考え、深めつづけること」
- ・項目 12 概念発達と高次の思考の支援
- サブスケール 5 学び・言葉の発達を評価する
- ・項目 13 学びと批判的思考を支え、広げるための評価の活用
- ・項目 14 言葉の発達に関する評価

以上 14 の項目ごとに「よい」と「とてもよい」の保育実践の記述である指標を見ていくことで質の高い保育を行う保育者のスキルや態度を読み取ることができる。

項目 1 では子どもがルールを守るような働きかけや子ども同士のトラブルを自分たちで解決できるよう共に考え支える援助を行う。

項目 2 では遊びは子どもの主体的な活動であり保育者はそこに参加し共に楽しんだり、考えたりしながらその遊びの発展を支えるような働きかけをする。また、計画の段階から子どもを参加させ、保育者が投げかける遊びの中からも子どもたちの自由遊びに繋げていけるよう支援する。

項目 3 では保育者は子どもが主体的に活動できるようふさわしい環境を構成する。そして保育者は一つの遊びに集中してかかわりつつ他のグループでの活動にも目を向け応答的にかかわる。

項目 4 では子どもたちが感情を出しやすいように環境や活動を考え、子どもたちのニーズや感情に対して応答的で子どもたちがポジティブな感情を持てるように支える。保育者自身が生き生きと楽しむ姿を見せる。また子ども同士がコミュニケーションを取り他の子どもの感情に気づき応答することを支える。

項目 5 では子ども同士が会話しながらかかわれるよう見本になったり簡単な質問をしたりする。子ども同士の遊びやかかわりが続くよう援助する。

項目 6 では子どもの話していることを理解するよう様々な方法を考え行う。理解が間違っても子どものせいにならず、自分の責任だと感じる。また、子どもが自分の考えを他の子に伝えるよう指示し、子ども同士が会話し、相手の言葉を聴くことを促す。

項目 7 では正しく適切な言い方を選び、言葉の

手本を示す。子どもたち自身の思考プロセスを分かりやすく指示し、子ども一人ひとりの言葉の発達を支える。

項目 8 では子どもが困っているときは快く手を差し伸べ、適切な時に褒めたり励ましたりする。また、全員の子どもと一対一で関わりまなざしを向けるなど子ども一人ひとりに対して丁寧に対応する。

項目 9 では計画的に子どもたちが興味関心を持ち、好奇心をくすぐられるような場や教材などを用意し、子どもたちが自ら活動し、問題解決を行うことを支える援助を行う。

項目 10 では子どもたちに本を読み聞かせたり、歌遊びや言葉遊びに興味を持てるような工夫や援助を行う。子どもたちの体験と本や歌遊び、言葉遊びが繋がるように環境を整える。

項目 11 では子どもたちが想像力や創造性を使って探究したり実験したりできるように支援する。子どもたちの興味が生じたときに科学的概念や説明概念を紹介するとともに子ども自身の観察や予想、評価などを支え、探究が深まるよう支援する。

項目 12 では子どもたちが自らの学びの経験を計画できるよう支援する。子どもたちの思考や問題解決を支え広げる活動を支援する。

項目 13 では子どもたちの様子を丁寧に見て、子どもたちにフィードバックし開かれた質問をしたり、助言をしたりする。子どもたちのポジティブな学びの構えを促すようなフィードバックを行う。

項目 14 では子どもたちの言葉の発達を評価し丁寧に見ていく。遊びを支えることが言葉の発達のために効果的であると認識し、援助する。

その他に「とてもよい」の指標の中に保護者との連携を取り上げているものが 3 項目ある。保護者も子どもが経験した内容を理解し保育者と同じ目線で子どもを見られるように連携することが質の高い保育を行う上で重要であるということが分かる。

4. 過程的な質からみた保育者のスキルと態度

これまで 2 つの研究の保育の質を高めるための過程的な質に関する評価指標を見てきたが、そこから保育の質を高める保育者のスキルとして大きく 3 つ、態度として大きく 2 つに分けて考えることができるかと考察する。

まずスキルの1つ目は子どもの主体性を尊重して支援することである。子どもが行動の主体として何かをやり遂げようとする時によりよく支援するスキルである。それは生活の場面でも遊びの場面でも必要なスキルである。子どもが自ら興味を持ち、安心して活動ができるように環境を整えたり、困ったときには手を差し伸べたり、適切な場面で褒めたり励ましたりすることであり、保育を通じてすべての援助の基本的なスキルとして持たなければならないものであると言える。

スキルの2つ目は子どもの社会性の発達を支えるための様々な支援を行うスキルである。その文化や社会で守るべきルールについて理解できるよう積極的に働きかけたり、行動の見本を見せたりすることである。また、子ども同士のかかわりを促し、その楽しさに共感し共にあることを嬉しいと感じられるようにすることやトラブルの時には年齢の発達に合わせて自分たちで納得して解決できるように支援することである。

スキルの3つ目は子どもの認知的発達を支えるための援助である。その中でもさらに3つに分けて考えられる。

1つ目は言葉の発達に関する支援である。言葉の理解を促すような働きかけや子ども同士の会話を支え、互いに話し合って理解し合えるようにかかわることである。コミュニケーションのツールとして言葉が非常に重要であり、互いを理解し合うためには必要不可欠なものである。そのことを意識して正しい言葉を使ったり、見本を見せたりするスキルを持つことが重要だと言える。

2つ目は絵本や物語を読み聞かせたり歌遊びや言葉遊びを楽しんだりできるような援助である。子どもたちは想像の翼を広げ、お話を考えたり歌遊びを楽しむことや本の中の世界と日常生活の中にあるものごとをつなげたり照らし合わせたりしてその世界を楽しむことができるために必要な援助である。

3つ目は子どもの探究心を大切に、自ら活動が展開できるように様々な支援を行うことである。子どもと共に考え、深めることや子どもの興味に合わせて科学的概念や説明概念を紹介したり、子ども自身の観察や予測、予想、評価などを支え、探究が深まるようしたりする支援のことである。

次に態度の1つ目は子どもの情緒が安定し安心

して生活できるように、保育者は元気に澆刺と子どもたちにかかわり、明るい雰囲気を作り出し、ポジティブな態度で子どもとかわることである。

2つ目は、保育者は常に物事を肯定的にとらえ、よりよくしていこうとする姿勢が重要である。何か問題やトラブルが起こったり、子どもがしてはいけないことをした場合でも感情的に怒鳴ったり叱ったりするのではなく、冷静になぜいけなかったのか、何か問題だったのか子どもに考えさせ、よりよくするにはどうすればよいのかなど子ども自身が考え解決できるように導くような態度が重要である。保育者が一方的に答えを与えるのではなく、子どもと共に考え、支えるという姿勢を基本的な態度として身に付けることが重要である。以上3つのスキルと2つの態度が質の高い保育を実践するために保育者が身に付けるべきものであると言える。こういったスキルや態度を身に付けた保育者との出会いが子どもたちのよりよい発達を支えていくということを認識する必要がある。

5. まとめにかえて

保育の質を構造的な質と過程的な質の二つに分けて捉え、後者の過程的な質に関してアメリカ国立小児保健・人間発達研究所 (NICHD) の長期追跡研究から出されたプロセス的特徴に関する具体的なかかわり方や養育態度とイラムらが作成したSSTEW スケールを手掛かりに保育の質を高めるための保育者のスキルや態度について考察を行った。その結果はこれまで述べてきたのだが、ここで分かったことは、保育の質を高めるためには「保育者がどのようにかわるか」ということが保育内容や保育方法を追究するベースとして非常に重要であり、子どもの発達に大きな影響を与えるということである。

保育内容や保育方法はそれぞれの幼稚園、保育所、認定こども園での理念や教育方針により様々なものが取り入れられている。どのような内容や方法が一番よいのかということは価値観が多様化する中で一概に語るのは難しい。しかし、保育者が子どもとどのような態度でかわり、何に配慮して援助するのか、子どもとのコミュニケーションをどのような方法でとるのかなどの保育者のスキルや態度が全ての保育のベースとして重要であ

り、そういった面での専門家であるという意識を持つことが、保育の質を高める保育者の資質として必要である。

保育者養成の立場で学生を見ると、保育内容やその内容を指導する（教える）方法について学ぶことに重点が置かれ、ここで述べてきたような保育者として必要なスキルや態度について系統立てて学ぶことができていないように感じている。今後、学生を指導する側として、ここで述べてきたようなスキルや態度について知識として伝え教えていくとともに、実践を学ぶ場である実習を通して、体得できるような具体的な指導方法を検討していくことが必要であり、今後の大きな課題である。

引用文献・参考文献

- 秋田喜代美・佐川早季子 2011 保育の質に関する縦断的研究の展望 東京大学大学院教育学研究科紀要 51巻,217-234
- ジェームズ・J・ヘックマン 著 大竹文雄 解説 古草秀子 訳 幼児教育の経済学 東洋経済新報社 2015
- イラム・シラージ, デニス・キングストン, エドワード・メルウィッシュ 著 秋田喜代美・淀川裕美 訳「保育プロセスの質」評価スケール 乳幼児期の「ともに考え深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」 明石書店 2016
- 日本こども学会 編 保育の質と子どもの発達 アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡研究から 赤ちゃんとママ社 2013
- OECD 編著 星三和子・首藤美香子・大和洋子・一見真理子 訳 OECD 保育白書 人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア（ECEC）の国際比較 2011
- 大宮勇雄 保育の質を高める 21世紀の保育観・保育条件・専門性 ひとなる書房 2006

－ 2016. 3.31 受稿、2016. 3.31 受理－